34　黄昏　和田英作

一面

大正三年（一九一四）
油彩・キャンバス
六五・〇×九一・〇

和田英作（一八七四～一九五九）は鹿児島に生まれ、三歳のときに家族と共に上京、長じて曾山幸彦の画塾で洋画を学び始めた。その後、原田直次郎の門下となり明治美術会へ出品していたが、白馬会の結成に参加し会員となるとともに東京美術学校で学んだ。フランスを中心にヨーロッパでの約四年間の留学期間を経て、東京美術学校教授となった。官展を主な作品発表の場とし、昭和七年（一九三二）に東京美術学校校長に就任、同九年には帝室技芸員に任命されるなど、旧派と新派の両派を引き継ぐ正系として近代洋画壇の中心的な存在であった。

フォンテーヌブローの森を詩情豊かに描いたバルビゾン派の画家たちの影響を感じさせる、闇に沈み込む直前の黄昏時の農村風景を描いた作品である。大正三年（一九一四）の第八回文展の出品作で、同時に出品された《赤い燐寸》（鹿児島市立美術館蔵）は真夏の日差しに照らされた鮮やかな人物像であったが、対照的に本作は限りなく静謐な画面となっている。燃え落ちる太陽の光を受けた逆光表現を一つの特徴とするバルビゾン派の影響を受けた和田は、白馬会第二回展に出品された《波頭の夕暮》（東京藝術大学大学美術館蔵）など、その活動初期から夕景描写を得意としてきた。だが、ここで描かれているのは、すでにあたりは闇に包まれようとする景色で、人々は帰路に就き屋外にはもう誰も残っていない、ただただうら寂しい情景である。どこにでも見られるような日常の風景のさらに裏側を描き、画壇での華々しい活躍の影に隠れた、和田自身の孤独な資質を垣間見せる作品であるともいえよう。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

名所絵から風景画へ――情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録No.76

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan